

学位論文概要

19世紀フランスロマン主義作家の旅行記に見られる旅の主体の変遷

羽生 敦子

本研究では旅の主体として、二項対立的に語られる、正統派の Traveler(英), Voyageur(仏)と近代の旅人 Tourist(英), Touriste(仏)の両主体の関係の言説について、新単語である後者が一般化した19世紀に注目し、19世紀近代フランスの旅を事例に「旅」と「旅の主体」を明らかにすることを提唱した。産業が飛躍的發展を見せ、社会システムそのものが変化の中にあった19世紀、当時の文化潮流ロマン主義の嚆矢とされる作家シャトーブリアン、スタンダール、さらにその終焉期とされるフロベールの旅から、新しい旅と旅の主体について観光的見地により考察を行った。本著の中では、19世紀の旅をカタカナのヴォワイヤージュ、旅の主体をヴォワイヤジュールと命名し、それ以前の旅(Voyage)とも以後の旅(Tourisme)とも異なることを明らかにした。

キーワード：Voyageur, Touriste, ロマン主義, シャトーブリアン, スタンダール, フロベール

1. 序論

(1) 研究の目的

過渡的な19世紀の旅と旅する人をヴォワイヤージュ、ヴォワイヤジュールと名付け、それ以前の旅(Travel)ともそれ以後の旅(Tourism)とも異なる旅と仮定し(図1)、ヴォワイヤージュの「旅の主体」となった19世紀の作家たちは、どのような旅の主体であったのか、旅の経験をしたのかについて明らかにすることが本研究の目的である。これまで漠然と語られてきた19世紀の旅あるいは旅の主体について、はっきりしない、なにか覆われたヴェールを少しでも拭うことができれば、近代観光史研究の一端に貢献できるであろう。

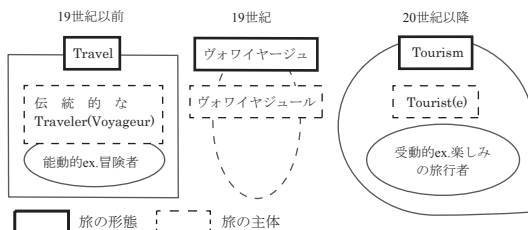


図1 旅と旅の主体の変遷 (1)

(2) 研究の方法

本研究は文献調査中心であり、まず、ツーリストの先行研究、あるいは研究の仕方についてアメリカとフランスの事情を整理した。第3章では「旅行記」を事例とする妥当性、第4章ではロマン主義という社会風潮と作家の旅について論じ、事例研究として、第5章シャトーブリアン (Chateaubriand, François René, vicomte de, 1768-1848), 6章スタンダール (Henri, Beyle, 1783-1842), 7章フロベール (Flaubert, Gustave, 1821-80) においてそれぞれの旅行記の分析を行った。

2. 旅行者とツーリスト(観光者)に関するディスカール

第2章では、ツーリストにまつわる否定的側面が形成された過程について、アメリカの観光研究、フランスの観光研究から検証を行った。

アメリカでは「旅行者から観光者へ」の変化は1950年代始まり、この現象についてブーアスティン (Boorstin, Daniel-Josephe) の著書『幻影の時

代』*The Image*の中で、主旨であるメディア論を展開するための事例の一つとしてとりあげた旅の主体の変化であった。おそらく彼の意味ではなかったが「かつての旅行者と観光者」のアーキタイプ、つまりかつての旅行者は旅に本物を求め、危険を冒しながら目的を達成するが、観光者は「擬似イベント」で満足し、「真正性」を求めない旅人であるという言説が、*The Image*を離れひとり歩きした。さらにこの言説を巡って、社会学からのアプローチによる観光研究が始まった。マキャネル (MacCannell, Dean, 1976) は『ザ・ツーリスト』*The Tourist*の中でブーアスティンを批判し、ツーリストを擁護した。1999年に出版された*The Tourist* ツーリストの第三版では、商業化の進みすぎた観光産業に苦言を呈し、ツーリストには絆 (human solidarity) を形成する力があることを言及した。さらに、ブーアスティン批判として、社会学の領域からコーエンと人類学の領域からスミスが、それぞれがツーリストの類型化を完成させ、ツーリストはブーアスティンが言及したような単純な存在ではないことを明らかにした。

*The Image*の出版から約40年を経た2001年、高岡が「擬似イベント」の再考を行い、ボードリヤールの先を行った発想であるとその着想の先見性を高く評価している。初版から半世紀が経つ現在でも、観光学研究においてブーアスティンへの言及は後を絶たない。

一方フランスでは、19世紀、すでにツーリスト研究が行われていたが、それは文学領域からの研究であった。1840年代には「生理学 Physiologie¹⁾」の中で「変わった存在」として取り上げられたこと、ツーリストは小説や戯曲の主人公となり、批判、あるいはからかいのターゲットとなったこと、さらにその経緯を明らかにすることがフランスにおけるツーリスト研究であった。また、英語 *Tourist* がどのように仏語 *Touriste* として受け入れられたか、19世紀ルースが「最初のツーリストはJ.J. ルソー」と定義したことをうけて、ツーリストとルソーの関係を明らかにすることなどもツーリスト研究であった。しかし、近年、ユルバン (J.D. Urbain) が、現在のツーリストを対象に社会学アプローチから研究

を行い新しい切り口の類型化を試みが行われている。

アメリカにおいてその時代の「ツーリスト」を対象とした社会学的研究が進められたのに対し、フランスでは文学研究として「ツーリスト」研究が行われていたことが明らかになった。

3. 「旅行記」とはなにか

シュポー (Chupeau, Jacques) は旅行記には実用的側面と娯楽的側面が存在すること、つまり旅行記の両義性を示した。17世紀以前は実用的側面が重視されていたが、実用的な発見も、読者は娯楽的に楽しむようになった。旅行記が「お楽しみ文学領域」へと移行したことが示される。17世紀、読者とは上流階級の人々であり、当時の文学潮流プレシオジテにも影響を及ぼした。気取った文学よりも旅行記のような簡潔な文章が好まれるようになり、「肘掛け椅子の旅」の流行が生まれた。読者は危険を伴うことなく、本物の旅を体験することができ、それを可能にしたのは簡潔な文体であった。小説の本質は「叙述 (語り)」であるが、旅行記には、描写と叙述 (語り) という2つの本質がある点をあげ、2者の相違を明らかにしている。

旅行記の役割に関して、17世紀以後は、絶対王政下の国策と関連が言及され、植民地政策に用いられたことや、キリスト教の普及や寄進を促すために使われた歴史的考察が行われる。

シュポーは17世紀を旅行記の転換期とする。以後、学者と作家との共同作業が進められ、「素材の良さ」と「卓越した文体、あるいは形式 (書簡形式など)」の複合的な作業により、旅行記は「文学作品」へと変化していった。

ル・ユナン (Le Huenen, Roland) は、旅行記の2つの領域、科学的言説と文学的言説を提示した。旅の主体が商人、船乗り、兵士、医者等である時代には、簡潔な文体で真実を伝える手段としての旅行記は「科学的言説」であり、ルネッサンス以降、旅行記に楽しみを求められて以降は、内容、形式に「文学的言説」が見られるようになった。特に、17世紀以降は叙述における変化が見られた。新しい情報が旅行記のテーマではなく、旅行

者の感情（心の描写）が中心となる。その例として、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』を提示する。旅行記が時代によって、国家権力と教会権力に利用された歴史的事実も披露し、「旅行記」は時代の価値観やイデオロギーに影響される存在であったことに言及する。しかし、19世紀ロマン主義の時代になると、旅行記に必要とされるのが、「旅から得られた結果」ではなく、旅そのものになったことについて言及する。サンサー（Sangsue, Daniel, 2002）は旅（論者は旅行記も含まれるのではないかと考える）を伝統的な旅（le voyage traditionnel）とユモリスティックな旅（le voyage humoristique：諧謔的な旅、皮肉な旅、感情が重視される旅）に分類する。伝統的な旅とは、「知るため、発見するため、学ぶため」の旅であり、旅行記はユナンの提言する科学的言説であった。中世の巡礼の旅や19世紀のシャトーブリアンやラマルチーヌ（Lamartine, Alphonse, 1790-1869）の旅もその範疇である。一方ユモリスティックな旅は、気ままで偶発的であり、迷いながらジグザグと進行するような旅であり、まなざしは皮肉に満ちている。シャペルとバシヨモン（Chapelle et Bachaumont）の『アンコース旅行記』*Voyage à Encausse*（旅：1656、出版年：1663）をユモリスティックな旅の嚆矢とみなす。このまなざしこそロマン主義作家たちがこの作品を評価する理由のひとつであると、サンサーは言及する。また、「大旅行」を好んだ伝統的な旅を皮肉った作品として、メーストル（Maistre de Xavier）の『私の部屋周遊記』*Voyage autour de ma chambre*（1794）等をあげる。さらに、ユモリスティックな旅は、旅の主体そのもの、新しい動物とも表現される Touriste を対象とする。

4. 作家の旅

アーリが『観光のまなざし』で提言して以来、ロマン主義的まなざしが、観光学において頻繁に応用されている。ロマン主義とは、18世紀から19世紀中葉にかけて、ヨーロッパを席卷した文化潮流であるが、それぞれの国で固有の特徴がある。しかしながら、観光学においてはイギリスのロマン主義だけを扱い、「ロマン主義的まなざし」

と結論づけてしまう傾向にある。本章では、フランスロマン主義について、*Grand Dictionnaire Universel du XIXème* 『19世紀ラルース大辞典』が掲載したロマン主義の定義にみられる、イギリス、ドイツのロマン主義と比較しながら、フランスの特徴を考察した。特徴は表4-1の通りである。

表1 イギリス、ドイツ、フランスのロマン主義の特徴

国	イギリス	ドイツ	フランス
特徴	文学, 芸術	哲学, 芸術	文学, 芸術, 政治
代表者	バイロン W.スコット	シラー ゲーテ	スタール夫人 シャトーブリアン

【フランスロマン主義】

フランスロマン主義「文学」において、詩や小説に関して言えば、「私」の存在と「私」の対極にある「他者」、そして「他所」への関心が特徴とされる。戯曲に関しては、1830年のユゴー（Hugo, Victor, 1802-1885）の作品「エルナニ」*Hernani* の上演を機にロマン主義宣言された。古典主義、簡単に言えば、形式を重視する主義が完全に否定された。絵画におけるロマン主義もデッサン（形式）よりも、色を重視するという特徴が見られた。文学において、色は「地方色」を描写することであった。フランスロマン主義の特徴として、文学も絵画も「他所」とは「オリエント」であったことを確認した。作品のテーマが「オリエント」であったことは19世紀以前にもみられるが、ロマン主義の時代、作家自身が、実際に「オリエント」を旅することが重要であった。「オリエント」という場所が、ナポレオンによって示され、具体性を持った地域に変化していたことも影響している。表にも見られるが、ロマン主義作家が政治にかかわるのもフランスの特徴である。「旅」と「亡命」は他所に行くという点においては、同種であった。作家の旅の年表を作成し、旅の頻度や旅の目的地について考察を行った。馬車のネットワークの充実期を経て鉄道や蒸気船の発展により、オリエント地域はもとより、ロシアまで、旅の距離は広がっていた。

近年フランスでは、旅する作家をエクリヴァン・ヴォワイヤジュールと呼ぶが、定義も対象作家も曖昧である。Ecrivains-voyageurs という

ウェブサイトがあり、その中の年表を調べてみると、1954年をエクリヴァン・ヴォワイヤジュールの誕生年としている。明記されていないが、恐らくサイトでは、ニコラ・ブーヴィエ (Bouvier, Nicolas) をエクリヴァン・ヴォワイヤジュールの嚆矢としているのだろう。彼の旅行記『世界の使い方』*L'usage du monde* は「20世紀旅のバイブル」とされている作品である。一方で、サイトは19世紀の作家の作品も掲載している。さらに、複雑なことに、19世紀旅行記の研究者ベルティは著書 *Littérature et Voyage au XIXe siècle* (2001) の中で、エクリヴァン・ツーリストという言葉を使用している。対象作家は、シャトーブリアン、ネルヴァル Nerval, Gerard de (1808-1855)、スタンダール、フロベール等でありエクリヴァン・ヴォワイヤジュールが対象とする作家と重複する。Voyageur とツーリスト (Touriste) が曖昧に使われるように、「旅する作家」を表す単語も使用者の判断にまかされるのであろう。

5. シャトーブリアンの旅

フランスの19世紀文学は「ロマン主義運動」を嚆矢とするが、そのロマン主義をイギリスから持ち込んだのがシャトーブリアンであることから「フランスロマン主義の父」と表現される。5章においては、まず、シャトーブリアンの人生について概観を行い、政治家、文学者としての活躍と冒険者としてのアメリカ旅行、巡礼者としてのオリエント旅行、さらに亡命を含めて「旅(移動)」の多い人生を送っていたことを述べた。

つぎに、ロマン主義と旅について、サン・マロとコンブールの場所性と「旅」との関係に注目した。ブルターニュ地方の港湾城塞都市サン・マロで生まれたことはシャトーブリアンに「冒険」や「旅」へと傾倒させたこと、また、財を成した父親が先祖の名誉復活のために購入したコンブール城での孤独な生活がシャトーブリアンに与えた影響を考察した。さらにイギリスでの亡命生活とJ.Jルソーへの対抗心にみられる態度から、シャトーブリアン自身に見られるロマン主義の萌芽について確認を行った。

本章において、研究対象の旅行記は『パリか

らエルサレムへの旅程』*L'itinéraire de Paris à Jérusalem* である。「ギリシャ」、「エルサレム」、「エジプト」の3章を分析し、シャトーブリアンはどのような旅をしたのか、どのような旅の主体であったのかについて省察を行った。

シャトーブリアンは1806年にエルサレムに向け、つまりオリエントに向け旅立った。旅の方法は前近代的であり、陸路では馬車、海路では帆船を利用した旅であった。ヴェニスからは、ギリシャ(オスマントルコ占領下)、トルコ、シリア、パレスチナ、エルサレム、エジプト、チュニスへと地中海の東側(レヴァント地域)と進み、帰路はスペインを通り、フランスに戻るという円環であった。フランスから下僕のジュリアンが同行し、旅行先では通訳を雇い、ジャンニッセルと呼ばれるオスマントルコの兵士もパシヤにより提供された。1806年当時は辞任していたが、すでに政治家としても、文学者としても名声を得ていたシャトーブリアンは、大政治家である外相タレーラン²⁾からオリエントでの旅の安全を保障ための証書を発行してもらっていた。つまりフランス領事が常駐するところ(フランク街)では、領事の世話になり、フランク街のないところでは、トルコの高官、アガヤバシヤの世話になることができた。特権階級の旅であり、民衆との直接的な接触はほとんど見られない。この旅の目的に関しては、エルサレムへの巡礼が最大の目的といわれるが、シャトーブリアン自身は、旅行記の中で、イメージを探すためと述べている。ジュネーブ大学で「オリエントのロマン主義作家たち(les Romantiques en Orient)」の授業を行ったビュートルは、講義中に『パリからエルサレムへの旅程』は『殉教者』*Martyres*の読者のためのガイド的な役割をしていると言及する。さらに、シャトーブリアンの学問的完成も目的のひとつであると説明する(Butor ほか)。

【ギリシャ】

シャトーブリアンのギリシャへの関心は、オスマントルコ治下のギリシャではなく、古代ギリシャであり、ホメロスの世界であった。当時一介の村に成り果てていたアテネに感動し、やっと見つけたスパルタでは、我こそが現在(1806年)のスパルタを記述する第一人者であると、歴史家と

しての「Voyageur」の役割を確認する。ギリシャを荒廃させた原因をイスラム教と断定し、厳しい見解を披露し続けるが、人々に対しては「素朴」であるとして優しいまなざしを向ける。旅人の当然の行動として旅の思い出として、パルテノン神殿の大理石を持ちかえる。

【エルサレム】

シャトーブリアンの先祖は十字軍に参加しているが、当時は十字軍に対する評価は「戦略行為」程度にしか理解されていなかった。そのため、先祖の名誉回復のため、あるいはキリスト教徒として、最後の十字軍となるべくエルサレムへと向かった。エルサレムは『パリからエルサレムまでの旅程』においてクライマックスであった。ギリシャで感動した風景も、エルサレムに比べると色あせるほどであったと感想を述べる。しかし、エルサレムも宗教施設（聖墳墓教会や修道院）以外は廃墟であった。とくに、巡礼者が少ないことは、カトリックの司祭への援助が不足することにつながり、シャトーブリアンの懸念材料となった。エルサレムの章ではガイドブック的な実用情報が満載であり、滞在費用の詳細が記述されている。自分自身の巡礼を契機に、あるいは、自分が書いた（これまでにない情報を載せた）旅行記によってカトリック教徒の巡礼者が増えるようにという戦略があるのではないだろうか。エルサレムの章では、「科学的言説」が展開されていた。

【エジプト】

エジプトでは悪天候がつづき、領事による援助や保護を受けている特別な旅行者であっても、ピラミッド登攀を経験することができなかった。さらにアレクサンドリアからつぎの予定地チュニスに向かう時も天候に左右された。自然には抗うことのできない「旅」が記述される。ピラミッドへの賞賛を惜しまないシャトーブリアンは、エルサレムで旅のクライマックスを経験した後にもかかわらず、「エジプトが一番美しい国にみえた」という感想を残す。

シャトーブリアンの旅は、「イメージを探しに」という目的からは、Touriste 的な旅の主体を確認することができるが、旅の方法、経験からは伝統的な旅行者 Voyageur である。

6. スタンダールの旅

スタンダールは、『赤と黒』、『パルムの僧院』、『恋愛論』の著者として知られた19世紀を代表するフランス人作家である。とりわけ、小説家としての認知度が高いが、『ローマ散歩』、本章の分析対象である『ある旅行者の手記』など旅行記や紀行文の著者として活躍し、「旅」との関係が深い作家であった。

まず、スタンダールの生涯の概要の中で、故郷グルノーブルを嫌悪していたこと、グルノーブルを離れた後は、陸軍省に入省しナポレオンのイタリア遠征への従軍したこと、遠征を契機に「イタリア」および「旅」の楽しみを知ったことを論じた。

スタンダールには「小説家」として活躍するほかに、「知事」という肩書を持ち役人としての生活があった。知事としての職務を適当に果たしながら、イタリアの各都市への旅は頻繁に行われ、ミラノでは社交場であったオペラ座の常連であり、芸術に関する豊富な知識を得た。またオペラ座ではイギリスの知識人、文化人との交流を持ち、「ロマン主義」（スタンダールは Romantisme ではなく Romanticisme と呼ぶ）という潮流を知った。スタンダールのイタリア好きは、墓碑に書かれた「ミラノの人、アンリ・ベール（スタンダールの本名）」に表れている。

6章では観光研究作品として、『ある旅行者の手記』を分析対象とした。邦訳タイトルからは理解しにくいのが、原題 *Mémoire d'un touriste* は出版当時(1838)はセンセーショナルなものであった。初めて Touriste という名詞が書籍のタイトルとして使用されたのである。スタンダールのこの作品により、Touriste が一般名詞化したと言われる。実際は、ルイ・シモン (Simond, Louis, 1767-1831) が1816年にすでに旅行記のタイトルで使用していたが、『赤と黒』 *Rouge et Noir* の著者として発表した旅行記のタイトルへの反響は大きかった。このタイトルに関する考察として、スタンダールは以前からシモンの文章を高く評価していること、『恋愛論』の序文を丸ごとシモンの文章から引用している実績(大岡, 1970)からも、筆者はシモンからの拝借の可能性を提言した。『恋愛論』の序文を書いたシモンと、1816年のシ

モンを同一人物として言及し、「ツーリスト」に関して論じた観光研究はこれまで見当たらない。観光学と文学領域における研究がリンクしていないことが明らかになった。また、スタンダールの英語好きが高じて英語由来の単語「ツーリスト」を用いたのではないかという説もある (Del Litto, 1965 他)。フランス語 *Touriste* 研究において重要な作品である。

さらに、この旅行記が、当時の流行、「他所」を記述することにその価値があったにもかかわらず、スタンダールの戦略、あるいは出版社の戦略とも言われているが、フランスという国内を対象としたことも斬新性があった。

『ある旅行者の手記』の特徴はその形式にもある。1837年にスタンダールは取材のためのフランス旅行をしているが、旅の主体である主人公はスタンダールではなく、鉄の商人L.フィリップである。フィリップを通し、「作家」、「商人」、「知事」の視点で、産業奨励下のフランスが描写される。当時、フランス語ツーリストとは「イギリス人の有閑階級の旅行者」を意味したが、主人公フィリップは、フランス人であり商人であった。タイトルへのスタンダールの意図を探ることは簡単ではないが、*Touriste* という新語を選択したのも、より作品をセンセーショナルなものにしたいという気持ちからだったのであろう。

スタンダールという旅の主体については、白田 (2007) は、「公用はさておいて、それは時には恋人や友人に会うためであったり、私的な用事のことであったりしたが、楽しみのための旅行が多い。その点では、かれは生涯に涉って漫遊 (ツーリスト) であったと言っても過言ではないだろう」(白田, 2007: 239) と結論づける。

スタンダール研究の第一人者であった Del Litto (1965) もスタンダールの旅の頻繁さを示したうえで、

「かれは浪費家ではない。かれは楽しむために金を使う。たとえば、旅行に出かけたいと思うと、たまらなくなる。さっそく旅にできるのはすばらしいことだ。その点でも、かれは先入観を許さない。かれの体躯や習慣からみて、かれが家に閉じこもり、出不精だとみな

されるかもしれない。とんでもない。かれは常に旅をしている。というのも絶えず多くの新しいものが観察できるから」(Del Litto, 1965: 235)

と「楽しみのための旅」を求める旅の主体を言及する。また、ミラノやパリの生活でも明らかのようにスタンダールほど都市の文化を楽しんだ作家もいない。芝居を見るためのロンドン旅行もある。現代の定義ではまさしくスタンダールは *Touriste* であると言えよう。

7. フロベールの旅

本論文においては1847年のブルターニュ旅行と1849年10月から1851年5月までのオリエンタ旅行を対象にフロベールと旅について考察を行った。2つの旅に共通することはデュ・カン (Du Camp, Maxime, 1822-1894) という、フロベールの友人でありつつ、保護者でもあるような野心家の文学青年との二人旅であったことである。ブルターニュ旅行については、生存中に出版されることはなかったが、旅行後に二人で制作した旅行記、奇数章をフロベール、偶数章をデュ・カンが執筆した *Par les Champs, par les Grèves* から分析を行った。

フロベールの時代は、フランスの産業革命が始まり、「近代化」が急速に進められた時代である。とくに鉄道など交通インフラにおいては、それ以前の時代には見られなかった発展があった。「ブルターニュ旅行」では今日の旅につながる「旅の新しさ」を見出しフロベールの旅の一つの特徴として明らかにした。方法として「旅の理由」、「行動」、「宿泊方法」、「交通手段」等の分析を行った。

フロベールの住むノルマンディー地方の隣ではあるが、辺境の地とされたブルターニュを旅先にしたこと、国内旅行にもかかわらず3か月という時間をかけたこともかれらの旅の独自性のひとつであった。「列車や乗合馬車に乗って、急いでブルターニュを横断するのではなく、徒歩で、背のうをしょって、長ズボンにはゲートルを巻き、杖を抱えながらの旅をするのだ (Mme Herpeux, 1940: 32)」に、フロベールの旅の姿勢が

表れる。ナントやプレスト等の都市部での行動を見ると、現在の「都市観光」を思わせる。ホテルに宿泊し、ナントでは、1843年にオープンしたアーケード街（パサージュ・ポムレー³⁾）で買い物を楽しみ、プレストでは牢獄や病院見学のほかに娼婦街にも足を伸ばす。シャトーブリアンに傾倒する二人はサン・マロやコンブールで、「文学散歩」も行う。食べ物の描写も多く、「オムレツ」、「ガレット」、「シードル」などが「ブルターニュの貧しさ」の換喩として記述される。しかし現在、それらは「地方の豊かさ（テロワール）」を示す食べ物として、観光政策のひとつとして扱われる。実際は周到に準備された旅ではあったが、旅行記では「気ままな楽しみの旅」を行う二人が描かれる。しかし二人にパスポート提示を求めた憲兵が、無職でなんの称号もない若者による「個人的な気晴らしのための徒歩旅行」を全く理解せず、フロベールは「(気晴らしのための旅は)信じがたい、馬鹿げたことに思われたのだ」と記述するほどであった。ツーリズムを髣髴させる旅、あるいはその到来を感じさせる旅ではあったが、ツーリズム到来にはまだまだ時間が必要であった。

「エジプト旅行」では「楽しみの旅」の側面と、文学者への道が拓かれる上で「旅」が作品に与えた影響を考察した。『オリエンタリズム』Voyage en Orientの中の『エジプト旅行』が、Voyage en Egypteとして1991年にDe Biasiの監修により出版された。『オリエンタリズム』そのものが、フロベールには出版の意思のないものであったが、姪のカロリーヌによって強制的に修正され1910年にコナール版フロベール全集に収められた。オリジナルは1991年に出版された『エジプト旅行記』であり、エジプトでの行動が赤裸々に記述されている。とくにエスナの娼婦（舞妓）クシウク・ハーネムと過ごした一夜の描写はフロベールの「エジプトでの最大の思い出」とも評価される。エジプトのまちは、バザールや黒人市場やイスラムの奇習（青空の下でも行われる卑猥な行為）とエキゾチックな女性の描写で語られるが、「バザールにはコーヒーと白檀のおいが漂っている」、「空豆の畑は満開でいい香りがする」など嗅覚表現によりオリエンタリズム的要素も抽出される。ピラミッドの大きさには感動するが、そこにある

落書きには憤慨する。しかしその落書きの多さからも、とりわけイギリス人にとっては、エジプトがすでに「旅」の目的地になっていたことが明らかになる。ピラミッドでは、デュ・カンがフロベールを驚かそうとへとへとになりながらも先回りをしていたずらを仕込むなど、「荘厳なる歴史建造物」と屈託のない若者の旅という二重構造となって表現される。エジプトの旅はカイロからナイルを遡上しふたたびカイロへ戻る4か月半の船旅であった。

8. 結論

第8章では、旅の流行を加速した社会条件、作家たちが短期間に新しい交通手段に馴化し「旅」を日常化させた諸相について論じた。シャトーブリアンとフロベールのオリエンタリズム地域を対象とした旅には、50年近い隔りがあり、交通手段や宿泊施設にも大きな違いが見られ、後者の時代には西洋人による「西洋化」、西洋人のために「観光化」されるオリエンタリズム、換言すればサイドが見せた『オリエンタリズム』の世界観が再現されていたことが明らかになった。それは、現在、中東で起こっている紛争が200年前より同一線上の問題であることを実感させる。

シャトーブリアン、スタンダール、フロベール、

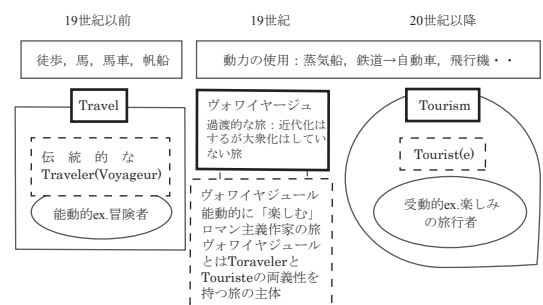


図2 旅と旅の主体の変遷 (2)

彼ら三人の作家たちは、何よりも自分の楽しみのための旅を積極的に行った旅人であった。図2に、「旅と旅の主体の変遷」として整理したが、ヴォワイヤージュとはTravelとTourismの中間にありそのどちらでもない旅である。過渡的な旅であ

り、近代化はするが大衆化はしていない。ヴォワイヤージュの主体である3人の作家たちは「楽しみ」を追求した点において、Travelerでもなく、能動的な態度において、Touristと非難されることもない旅人ヴォワイヤージュであった。■

【注】

- 1) 生理学とはフランスで19世紀中頃の特定の社会の生態描写、分析を目的とした書物の標題である。
- 2) Talleyrand, Charles-Maurice de, 1754-1838) フランス革命から7月王政まで、首相、外相、大使としてフランス政治に君臨した人物。
- 3) 現存するアーケード街である。映画監督ジャック・ドゥミはこの場所で映画Lola(1960)を撮影している。

【参考文献】

- 荒木善太 (1988) : 『ネルヴァル全集』月報3 (7月) 筑摩書房
- (2011) : 「風景」の時代—ロマン主義の文学と風景のコードについて、仏語仏文学研究 (42), 17-27p. 東京大学仏語仏文学研究会
- Benjamin Walter (1982) Das Passagen-Werk, Herausgegeben von Rolf Tiedemann, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main (= 今村仁司・三島憲一訳ほか (1995) パサージュ論第一巻. 東京, 岩波書店, 480p.
- (= 野村修編訳) (1994) 「ボードレールにおける第二帝政期のパリ 1938, 135-275p」, ボードレール他五編—ベンヤミンの仕事2—, 東京, 岩波書店, 357p.
- Berchet, Jean-Claude (1985) Le voyage en Orient : Anthologie des voyageurs français dans le Levant au XIXe siècle, Paris ; Robert Lafont
- Berty, Valérie (2001) Littérature et voyage : un essai de typologie narrative des récits de voyage français au XIXème siècle, Paris ; L'Harmattan
- Boorstin, Daniel-Joseph (1962) the Image : A guide to Pseudo-Events in America (= 後藤和彦, 星野郁美訳 (1964) 幻影 (イメージ) の時代—マスコミが製造する事実. 東京, 東京創元社, 340p.)
- Boyer, Marc (2005) Histoire Générale du Tourisme Du XVIe au XXe siècle, Paris, L'Harmattan.
- Brendon, Piers (1991) Thomas Cook : 150 years of popular tourism, London : Secker & Warburg (= 石井昭夫訳 (1995) トマス・クック物語—近代ツーリズムの創始者. 東京, 中央公論, 602p.
- Carré, Jean-Marie (1932) Flaubert et Maxime Du Camps, Voyageurs et Ecrivains français en Egypte, Caire (= 平井照敏訳 (1968) フローベールとマクシム・デュ・カン (1849-1850), フローベール全集 別巻 (1968) 東京, 筑摩書房, 525p.

- Cassou, Jean (1967) Du voyage au tourisme, Communications (10), 25-34p.
- Chateaubriand, René-François (1968) L'Itinéraire de Paris à Jérusalem in Collection GF Flammarion
- (1969) L'Itinéraire de Paris à Jérusalem in Les œuvres romanesques et voyages II, présenté par Maurice Regard, Gallimard.
- Chupeau, Jacques (1977) Les récits de voyages aux lisières du roman, Revue d'histoire littéraire de la France, 536-553p. P.U.F
- 檀上文雄 (1980) : フランス鉄道時代の作家たち. 広島, 溪水者, 208p.
- DE Maistre, Xavier (1927) Voyage autour de ma chambre, in Les classiques pour tous Paris: Librairie Hatier.
- Del Litto, Victor (1965) La vie de Stendhal, Paris : Editions du Sud. (= 鎌田博夫, 岩本和子訳 (2007) : スタンダールの生涯. 東京, 法政大学出版局, 339p.)
- Del Litto, Victor ed. (1992) Stendhal Voyages en France: Mémoires d'un Touriste. Voyages en France. Voyage dans le Midi de la France in Bibliothèque de la Pléiade, Paris : Gallimard.
- Dord-Crouslé, Stéphanie (2010) Le <<Livre des voyageurs>> au XIXe siècle : usage et manifestations littéraires avec application au cas ou de Gustave Flaubert, 立教大学フランス文学研究科フランス文学紀要 (40), 19-38p.
- Flaubert, Gustave (1847) Par les champs et par les grèves, voyages et carnet de voyages Club de l'Honnête Homme 1973.
- Flaubert, Gustave (1971) Correspondance, Nouvelle Edition Augmentée, Première Série (1830-1846), Paris : Louis Conard, Libraire-Editeur (コナル版).
- (1973) Correspondance I (janvier 1830-juin 1851), présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris : Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade).
- (1980) Correspondance II (juillet 1851-décembre 1858), présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris : Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade).
- (1991) Correspondance III (janvier 1859-décembre 1868), présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris : Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade).
- (2007) Par les Champs et par les Grèves 1847 in VOYAGES, présenté par Dominique Barbéris, Paris: arléa.
- (2007) Voyage en Egypte 1850 in VOYAGES, présenté par Dominique Barbéris, Paris: arléa (= 斎藤昌三訳 (1998) フローベールのエジプト. 東京 法政大学出版局, 333p.
- (1987) Par les champs et par les grèves (= 渡辺仁訳 (2007) : プルターニュー紀行 野を越え, 浜を越え. 東京, 評論社, 323p.

- (2008) Dictionnaire des idées reçues. Libro texte intégral, Paris :Flammarion
- (2008) Voyage en Orient (1849-1851), Présenté par Claudine Gothot-Mersch Paris :Gallimard.Girard, Yves, éd.(2007) Chapelle et Bachaumont Voyage d'Encausse, Paris : Honoré Champion Editeur.
- Goulemot, Jean-Marie (2004) Sur les trace des écrivains voyageurs, Magazine littéraire (432), 22-25p.
- 羽生敦子 (2011) : ロマン主義運動と王政復古期のピアリッツの発展, および第二帝政下のピアリッツの変容について. 立教大学大学院観光学研究科博士前期課程, 2010年度修士論文
- (2012) : 20世紀ツーリストの概念の変容について. 立教観光学紀要 (14) ,25-30p.
- (2013) : ブルターニュ旅行に見られるフロベールの旅の新しさについての考察. 立教観光学研究紀要 (15),23-34p.
- 運実重彦編訳(1967) : フロベール全集 8. 東京, 筑摩書房, 461p. (底本はコナール版)
- 畑浩一郎 (2003) : 都市と旅行者—19世紀前半のオリエンツ旅行記をめぐって. 仏語仏文学研究 (28), 51-76p.
- (2009) : 自分を語る旅行者—シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』. 仏語仏文学研究 (39), 25-44p, 東京大学仏語仏文学研究会.
- (2011) : ヨーロッパとアジアの狭間にて—テオフィール・ゴージェ『コンスタンチノーブル』(1853) 仏語仏文学研究 (42), 79-92p.
- 井手勉 (2001) : スタンダールとオリエンツ. 愛知産業大学短期大学紀要 (14),131-150p.
- (2007) : スタンダールとスペイン—スペイン, もう一つの「オリエンツ」. 中京大学教養論集 48(4), 637-666p.
- 石井洋二郎 (2009) : 異郷の誘惑—旅するフランス作家たち. 東京, 東京大学出版会, 325p.
- 石川美子 (2000) : 旅のエクリチュール. 東京 白水社, 251p.
- 鹿島茂 (1990) : 馬車が買いたい! 19世紀パリ・イメージ. 東京, 白水社, 248p.
- (2012) : 職業別 パリ風俗 新装復刊. 東京, 白水社, 257p.
- 桑原武夫・生島遼一編 (1972) : スタンダール全集 8 恋愛論・恋愛書簡. 京都, 人文書院, 457p.
- 栗栖公正 (2007) : スタンダール 近代ロマネスクの生成 南山大学学術叢書. 名古屋, 名古屋大学出版会, 59p.
- Le Huenen, Roland (1987) Le récit de voyage : l'Entrée en littérature, Etudes littéraires 20(1), 45-61p.
- Le Herpeux (1940) Flaubert et son voyage en Bretagne, Annales de Bretagne 47(1), 1-152p.
- Lund, Hans=Peter (1986) François-René De Chateaubriand, Mémoires d'outre-tombe, Paris: Presses Universitaires de France.
- 中島俊郎 (2007) : イギリス的風景—教養の旅から感性の旅へ. 東京. NTT 出版, 246p.
- 中川久定 (1978) : 自伝の文学—ルソーとスタンダール. 東京, 岩波書店, 191p.
- 野崎敏 (2010) : 異邦の香り—ネルヴァル『東方紀行』論. 東京, 講談社, 437p.
- MacCannell, Dean (1976) The Tourist, New theory of the leisure class, Newyork: Schocken Books.
- (1999) The Tourist, New theory of the leisure class, Berkley and California: University of California Press.
- 小倉和子 (2000) : シャトーブリアン『モンブランへの旅』について. 立教大学観光学部紀要 (2), 50-53p.
- 小倉孝誠 (2006) : 近代フランスの誘惑—物語 表象 オリエンツ. 東京, 慶應義塾大学出版社株式会社, 248p.
- Philippe, Antoine (2003) Chateaubriand en Egypte : le voyageur désenchanté, Romantisme (120),27-35p.
- Said, E.W (1985) Orientalism, Aitken :Stone & Wylie Ltd.(=板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳 (1993) オリエンタリズム 上下, 東京, 平凡社)
- 斎藤昌三訳 (1998) : フロベールのエジプト. 東京, 法政大学出版局, 333p.
- Sangsue, Daniel (2001) Le récit de voyage humoristique (XVIII-XIXE SIECLES), Revue d'histoire littéraire de la France, 1139-11629. P.U.F
- Stendhal (1959) De l'Amour (1822), texte établi avec introduction et notes par Henri Martineau, Paris, Garnier Frère (=大岡昇平 (1970) : 恋愛論, 東京, 新潮社, 618p.)
- (1992) Mémoires d'un touriste, Voyage en France, Voyage dans le Midi de la France in Voyages en France présenté par V. Del Litto, Paris, Gallimard. (Bibliothèque de la Pléiade)
- 角津美愛 (2005) : スタンダールと山. スタンダール研究会会報 (15), 7-9p.
- Taine, Hypolite (1860) Voyage aux Pyrenées (=杉富士雄訳 (1973) 古典文庫ピレネ旅行記. 東京, 現代思想社, 397p)
- 高岡文章 (2001) : 観光研究における D.ブーアスティンの定型化—「本物の」観光をめぐって. 社会学研究科紀要 (53), 69-78p 慶應義塾大学社会学部.
- 高橋秀爾 (1990) : フランス絵画史—ルネッサンスから世紀末まで. 講談社, 東京, 398p.
- Urbain, Jean-Didier (2002) L'idiot du voyage : Histoires de touristes, Paris ; Petite bibliothèque Payot.
- Urry, John (1990) The Tourist Gaze : The leisure and Travel in Comtemporary Societies, London : Sage (=加太宏邦訳 (1995) 観光のまなごし—現代社会におけるレジャーと旅行. 東京, 法政大学出版局, 289p.
- 白田紘 (1991) : スタンダール イタリア旅行記 I—ローマ, ナポリ, フィレンツェ (1826). 東京, 新評論, 257p.(Stendhal :Rome, Naple, Florence 1826 in

- Bibliothèque de la Pléiade(1973) の翻訳)
—— (2007) :スタンダール氏との旅. 東京, 新評論,
262p.
- Vergeade, Suzanne (1990) Un aspect du voyage en
chemin de fer : le voyage d'agrément sur le réseau
de l'Ouest des années 1830 aux années 1880, Histoire,
économie et société (1) Les transports. 113-134p.
- Viviani, Marie-Hélène (2010) Le voyage de
Chateaubriand en Amérique (conférence の報告書).
渡辺仁訳(2007) : プルターニュ紀行—野を越え, 浜を越え.
東京, 評論社, 323p.
- Weber Anne-Gaëlle (2006) Le genre romanesque du récit
du voyage scientifique au XIXème siècle, Sociétés &
Représentations(21)59-77p. Paris : Publications de la
Sorbonne.
- 安村克己 (2012) : ザ・ツーリスト : 高度近代社会の構造
分析. 東京, 学文社, 259p.
- 山辺雅彦 (1983) : ある旅行者の手記 I. 東京, 新評論,
435p. (Stendhal :Mémoire d'un Touriste(1838,1854刊)
の翻訳)
—— (1985) : ある旅行者の手記 II. 東京, 新評論,
454p.(Stendhal :Journal d'un voyage dans le midi de
la France(1927刊) の翻訳)
- 山下晋司編 (1996) : 観光人類学. 東京, 新曜社, 211p. (吉
見俊哉 : 第二章 : 観光の誕生—擬似イベントを超えて)

【参考資料】

- ジュネーブ大学のオーディオドキュメント
Butor, Michel (1975-76) Les romantiques en Orient
ピュートルによるジュネーブ大学の講義「オリエント
のロマン主義作家たち」(1975-76)
[https://mediaserver.unige.ch/play/55782/butor%20
michel,%20Les%20romantiques%20en%20Orient](https://mediaserver.unige.ch/play/55782/butor%20michel,%20Les%20romantiques%20en%20Orient)
2013年8月—9月検索

表2 作家の旅

年代	1790s	1800s	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s
(1) Chateaubriand (1768-1848)	・アメリカ旅行 (1791) ・ロンドンへ亡命 (1793-1800)	・イタリア赴任(1803) ・オリエント旅行 (1806) ・Vallee aux Loups (Paris) (1807)		・ベルリン赴任(1821) ・ロンドン赴任(1822) ・ローマ赴任(1828) ・ピレネーの温泉地へ (1829)		・スイス旅行(1832) ・ロンドン旅行(1833)		
(2) Lamartine (1790-1869)			・イタリア滞在(1811) ・エクス・レ・パン (1816)	・ナポリに赴任 (1820-31) ・イギリス、パリ(1821) ・フィレンツェ(1822)		・オリエント旅行 (1832) ・セルビア(1833)		
(3) Stendhal (1783-1842)		・ナポレオン遠征 (イタリア)(1800)	・ナポレオン遠征 (ロシア)(1811) ・ローマ、ナポリ、パリ、 ロンドン(1817) ・グルノーブル、ミラノ (1818) ・フィレンツェ、ミラ ノ、 グルノーブル(1819)	・ボローニャ(1820) ・コモ湖、パリ、ロンド ン(1821) ・フィレンツェ(1823) ・パリ(1824-1826) ・ロンドン(1826) ・イタリア滞在(1827) ・南仏旅行(1829)	・チヴィッタ＝ヴェッ キア赴任(1830) ・パリ(1831) ・3年間の休暇(パリ) (1836) ・第一回取材旅行 (フランス)(1837) ・第二回取材旅行 (フランス)(1838)			
(4) Balzac (1799-1850)					・スイス(スシャテル、 ジュネーブ)(1833) ・フェルネー、コッパ (1834) ・ウイーン(1835) ・トリノ(1836) ・ヴェニス、フィレ ンツェ、ボローニャ (1837)、 ・ベリ＝地方、マルセ イユ(1838)	・サント・ベテルスブ ルグ(1843 jul-sep) ・ドレスデン、ノルマ ンディ地方、オラン ダ、バーデン・バーデ ン、マルセイユ経由ナ ポリ(1845) ・ローマ、チヴィッタ ＝ヴェッキア、ジェノ バ、バーゼル、ハイデ ルベルグ、ウイース バーデン(1846) ・フランクフルト、 ウクライナ、キエフ (1847) ・パリ(1848) ・ウクライナ(1849)	・パリ(1850)3か月後 死去	
(5) Hugo (1802-1885)						・ピレネー旅行(1840)	・ニュージャージー島 (1850) ・亡命生活(1851)	
(6) Gautier (1811-1872)						・スペイン旅行(1840) ・アルジェリア旅行 (1845) ・ベルギー、オランダ 旅行(1846)	・イタリア旅行(1850) ・ギリシャ、トルコ (1852) ・ドイツ旅行(1854) ・ロシア旅行(1858)	・エジプト旅行(1869)
(7) A. Dumas (1802-1870)				・パリ(1822)	・スイス(シャトーブ リアンに会う)(1832) ・イタリア旅行 (1835)・ ベルギー、ドイツ (1838)	・イタリア滞在(1840) ・スペイン、北アフリ カ旅行(1846)	・ブリュッセル亡命 (借金からの逃亡?) (1851) ・オランダ、ドイツ旅 行(1852) ・ジャージー島へのユ ゴ訪問、イギリス、 ドイツ旅行(1857) ・ロシア旅行(サント・ ベテルスブルグか らコーカサスまで) (1858) ・イタリア旅行(1859)	・シシリー島(地中海 をヨットで)ガリバ ルディに武器を渡す (1860) ・ナポリ滞在(1861- 1864) ・オーストリア、ハン ガリー旅行(1865) ・ドイツ旅行(1867) ・プルトーニュ(1869)
(8) Nerval (1808-1855)					・ドイツ旅行(1838) ・オーストリア旅行 (1839)	・ベルギー(1840) ・オリエント旅行 (1842) ・ベルギー、オランダ、 ロンドン(1844)		
(9) Flaubert (1821-1880)					・Trouville/Mer (1836から)	・ピレネー旅行(1840) ・家族旅行(南仏) (1845) ・プルトーニュ旅行 (1847) ・オリエント旅行 (1849)	・ロンドン万国博覧会 見学(1851) ・チュニジア旅行 (1858)	
(10) M. du Camp (1822-1894)						・イタリア、アルジェ リア旅行(1841) ・トルコ、イタリア旅 行(1844) ・プルトーニュ旅行 (1847) ・オリエント旅行 (1849)		
(11) Beaudelaire						・モーリシャス島へ (1841)		
フランスにおける 交通網の整備状況					・地中海にて蒸気船就 航(1833) ・Paris-St.Germain en Laye 鉄道開業(1839)	・Paris-Orleans鉄道開 業(1842) ・Paris-Rouen鉄道開 業(1843) ・Orleans-Tours鉄道 開業(1847)	・Pars-Lyon-Marseille 鉄道開通(1855)	

Transformation of Travel and Travelers in 19th Century through French Romantic Writers' Travel writings

HANYU Atsuko

This study aims to research Travel and the Subject of Travel (traveler or tourist) of the 19th century in France by analyzing travel writings of French Romantic writers. In this paper, I called the travel of 19th century ヴォワイヤーヂュ ([vwa-jaʒ] written in katakana)¹⁾, also called the subject of travel of 19th century ヴォワイヤジュール ([vwa-ja-ʒ œ:r] written in katakana)²⁾. In chapter 2, researching the history of the dichotomy between the Traveler (Voyageur) and the Tourist (Touriste)³⁾ in France and in the USA, I found that the method of researching between the two countries is quite different, i.e. in France Tourist Studies has belonged to the domain of literature since the 19th century but in the USA, it began to be studied in the 20th century as one of the fields of sociology.

In chapter 3, I examined Chupeau's and Le Heunen's theses which are considered classical Legacy theses about Travel Writing in Francophone literature. This is the first time that these are introduced to the research of tourism in Japan.

In chapter 4, French writers' and painters' travels under the influence of Romanticism are discussed. In France, a new word, *touriste*, was generated in the 19th century. In this period, i.e. the Second Empire under Napoléon III, industry progressed rapidly, which led to the transformation of society (still under imperialism). Corresponding to this social movement and the Romanticism movement, the subject, purpose, method, and destination of Travel changed. Travel is no more the Travel which was before. From chapter 5 to chapter 7, there are case studies; Chateaubriand's travels, Stendhal's travels, and Flaubert's travels are presented.

In Chapter 8, I discussed the Travel influenced by new customs, for example the railway, which accelerated the development of travel as fashion. Writers used to take trains easily, replacing diligence. Fifty years separate the Orient Travel of Chateaubriand and that of Flaubert, so their travel style was quite different. Chateaubriand had no rail, nor many hotels in the Orient, but 50 years before Chateaubriand, the travel custom was almost the same. Chateaubriand was very proud of being there, but Flaubert was simply enjoying being there. At Flaubert's time, there already existed the Orient manipulated (constructed) by Occidental people as mentioned by Said in *Orientalism*. It is concluded that though the travel materiel and travel conditions are not the same among the three writers, they traveled positively for their own pleasure. Those who travel for pleasure are no longer travelers, but ヴォワイヤジュール [vwa-ja-ʒ œ:r] who also traveled positively, are not tourists but ヴォワイヤジュール. And the travel which ヴォワイヤジュール enjoyed was ヴォワイヤーヂュ [vwa-jaʒ]. It is no more Travel that is painful, but not yet tourism that exists just for pleasure.

Keywords: the Traveler (Voyageur), the Tourist (Touriste), Chateaubriand (1768-1848), Stendhal (1783-1842), Flaubert (1821-1880)

1) ヴォワイヤーヂュ ([vwa-jaʒ] written in katakana) which I used for this paper means 19th century travel, is not voyage in French

2) ヴォワイヤジュール ([vwa-ja-ʒ œ:r] written in katakana) which I used for this paper means 19th century travelers, is not voyageur in French

3) Tourists are criticized for not traveling positively, but merely traveling for their own pleasure.